

フロイトと狼男 (3)

村 井 翔

4. 『狼男の言語標本』

アブラハム、トローク共著『狼男の言語標本』の冒頭部分、第I部「魔法の言葉」は1970年に書かれ、翌年には精神分析の専門誌に載った。その後の彼らの研究を後押ししたのが、その年に英語版が出たガーディナー編『狼男自身による狼男』であったことは間違いない。彼らの論文を贈呈されたガーディナーは、お返しにパンケイエフの自分宛ての私信を二人に送ってくれた。1973年以降、残りの部分を書き継がれ、本は1975年に完成。翌1976年に出版される際には、アブラハムの二十年来の盟友であったジャック・デリダが本全体の三分の一近くを占める長大な序文《FORS》を寄せた。FORSとはフランス語の名詞 for (裁きの場、内奥) の複数形と前置詞 fors (~を除いて) のかけことばである。狼男はまだ存命中であったから、著者たちは会おうと思えば会えたはずだが、フロイトがダニエル・パウル・シュレーバーに会わなかったように、患者本人に会おうとはしなかった。したがって、彼らが参照したのはフロイトの論文、および『狼男自身による狼男』に含まれるパンケイエフの回想記、ブランズウィックの症例補足などのテキストだけである。彼らは足かけ五年にわたって、こうした「狼男」文献に取り組んだことになる。本の内容に立ち入る前に、簡単に二人の著者について紹介しておこう。

ニコラ・アブラハムは1919年、ハンガリーのユダヤ人の家系に生まれた。オーストリア＝ハンガリー二重帝国が崩壊しハンガリーが独立国となった直後であったが、ハンガリー政府はやがて二重帝国とは違ってユダヤ人に抑圧的な政策をとり始め、ユダヤ人では大学入学がかなわぬ状況になったので1938年、アブラハムは故国を捨ててパリに移り住んだ。ソルボンヌで哲学と美学を学び、ドイツ軍占領下ではトゥールーズでレジスタンス活動をしたという。1944年、大学卒業資格を得て国立科学研究センター美術部門の研究員となるが、1942年に結婚した妻エトラ・(旧姓) フライシュマンが1945年に精神病院に入院する事態になったことが、彼を精神分析に向かわせたようだ。二人の先輩に教育分析を受けて、1959年にパリ精神分析協会から分析家の資格を与えられた。この頃からマリア・トロークが仕事と人生の両面にわたる彼のパートナーになり、理論的な主論文『表皮と核 L'écorce et le noyau』(1968、1978年に同名の単行本に収められる)を含めた彼の著作はすべて二人の共著として書かれている。アブラハムは正統派の団体、国際精神分析

協会にも加盟せず、ラカン派にも与せずという第三の立場を生涯、貫いたまま1975年、パリで没し、『狼男の言語標本』は彼の遺作となる。

マリア・トロークは1925年、やはりブダペストのユダヤ人家庭に生まれた。第二次大戦の終わりまで祖国にとどまったが、社会主義国となったハンガリーを逃れて1947年にパリにやってきた。最初は自然科学者を志していたようだが、やがて教育心理学に転じソルボンヌ大学で臨床心理士の資格を取得、1954年に児童分析を専門とする心理カウンセラーとなった。アブラハムの死後、彼女は彼の妹の息子、ニコラス・ランドと共同研究するようになり、1990年にはランドと結婚してアメリカに移住、1998年にニューヨークで没した。その直前、彼女はランドとの共著で『フロイトへの問い Questions for Freud』(1997)という本を出している。精神分析理論の独特の歪みの原因を、フロイト家の特異な家族構成とそこで幼年期の彼が負ったトラウマ、そして「秘密」を守るために自分は「正常」だと見せかけようとする反動形成に求めた、つまりフロイト本人を精神分析しようとした本である。彼らの仮定するトラウマそのものには同意しない私も、後段の反動形成については全くその通りだと考える。数あるフロイト研究書の中でも屈指の好著で、私自身の研究姿勢もこの本から少なからぬ影響を受けている。

続いては、『狼男の言語標本』において、著者たちが議論の大前提として用いる「取り込み introjection」、および「体内化 incorporation」なる概念について説明しよう。「取り込み」は彼らの先輩であったハンガリー生まれの分析家、シャンドル・フェレンツィの提唱した用語で、たとえば迷信深い母親に育てられた子供が母親そっくりになるという場合、子供は母親の思想を取り込んだことになる。もちろん子供は皆、社会の規範を取り込んで、あるいは象徴秩序に取り込まれて超自我を形成し、大人になってゆくわけだが、「取り込み」という場合、より広い概念である「同一化 identification」よりも無意識的なニュアンスが強いように思われる。通常、主体は「取り込み」によって自らを豊かにしてゆくものだが、破局的な出来事、まさにトラウマによって主体の発達が阻害されてしまうと、自我は取り込まれた「他者」たちを同化し、自分のものにする力がなくなり、「他者」は自我の中でも他者であり続けてしまう。このような主体の支配の及ばぬ「取り込み」を著者たちは特に「体内化」と呼ぶ。正統精神分析では、「取り込み」とさして区別されない用語だが、著者たちは明らかにネガティブな含意をもって「体内化」を用いる。パンケイエフの場合、はっきりとした交替人格の登場は確認されないとはいえ、フロイトら治療者たちに対する転移という局面での狼男に著者たちが見ているのは、このような多重人格こと解離性同一性障害に近いような現象である。解離性障害の原因が精神的ストレスであることは今日も強く主張されているが、著者たちが狼男の心の病気の原因として、はっきりとトラウマを持ち出したことは、1990年代に盛んになる PTSD 論の先駆とも言えよう。

そう、だからアブラハム/トロークは、フロイトがあんなに苦労して作り上げた「原光景」、赤ん坊のセルゲイが両親の性交場面を見たに違いないという物語をあっさりと退けてしまうのであ

る。子供が両親のセックスを覗いてしまうというのは比較的起こりうる事態であろう。フロイトが述べたように事後的にその意味が把握されるとしても、見た子供が例外なく、狼男のような病気になるとうとは考えられない。彼の病気の深層にはもっと別の「秘密」が隠されているはずではないか（後の『フロイトへの問い』では同じ問いがフロイト本人に対して発せられる）。そこで、著者たちはまずセルゲイと姉アンナとの関係に目を向ける。5歳未満のある日「お姉さんが彼のペニスをつかんで、もてあそんだ」⁽¹⁾ことは確かにフロイト論文に記載されている。パンケイエフ本人の証言通りであろう。フロイトの論文には、十歳以上年長のいとこが語った話として、姉はまだ4、5歳の頃、いとこの膝に乗せられると、ズボンの前開きを開いて彼のペニスをつかもうとした、とも書かれている。しかし、ここから著者たちの空想は華々しく飛躍する。狼男氏の幼年期の物語、その第一幕である。1) 姉と彼との間で行われた行為は、それに先立って姉と父親の間で演じられた性的行為の反復だった。そして姉は弟にそのことを伝えたはず。したがって、彼は姉－父親間の行為を実際に見たわけではないのだが、言葉で伝えられたこの事実は彼にとって絶対に口外してはならぬ「秘密」となった。2) しかも父親を愛すると同時に憎んでもいた姉は、ペニスをいじって彼を気持ち良くしながら「こんなもの切り取ってやる」と言ったに違いない。フロイトの言う「ペニス羨望」、いやむしろペニスに対する嫉妬である。となれば、フロイトが論じた子守女グルーシャや乳母ナーニャによる去勢威嚇は、姉の言葉の反復に過ぎなくなる。もちろん彼自身がこのような「秘密」を語ることは決してないのだが、もしこれが実際にあったとしたら、坊やはどうしたら良かったのか。著者たちのフランス語はかなり難しいので、ここでは長い直接引用を避け、引用をまじえたパラフレーズという形で私なりの理解を示そう。

彼のペニスを切り取ろうとするような人間は排除しなければならないが、彼は姉を愛していたので、それはできなかった。さらに彼と姉との背後には父親と姉との行為があり、姉は彼の理想像でもあったから、姉に成り代わることによって父親にも愛されたかった。パンケイエフに逆転移したフロイトは後にそれを、父が母に与えた快楽を彼も得たいのだと解釈することになる。そこで彼は姉を自我の中に取り込んで、対象としては消し去った。著者たちの説明は次の通り。「姉のそのような体内化はだから、互いに両立不可能な二つの役割を、〈自我理想〉の役割と愛の〈対象〉の役割とを彼女に合わせもたせる唯一可能な方法だと理解される。彼女を抹殺しないために彼女を愛し、彼女を愛さないために彼女を抹殺する唯一の方法である」⁽²⁾。彼と姉との場面では、姉が彼を誘惑したのは明らかだが、この場面は父親と姉との場面と重なり合った。父親もまた彼の自我理想であり、彼は父親のように姉に誘惑され、愛されたかった。そこで彼は父親にも成り代わったが、姉は彼と父親のペニスを愛しつつ憎み、快楽を覚えるなら切り取ってやると脅している。「それ以後、彼の子どものペニスはもはや密かに父親のペニスと重なり合うことしかできなくなったのだ。こうして矛盾した二重の緊急要請が生じる。父親のペニスは死んではならず、かつ享受してはならない。さもなくば、彼、狼男は抹殺されてしまうであろう。われわれは、こ

のような内的状況が、いかにして一生涯、解消されないままであり続けることができたのかを考えるのである」⁽³⁾

約二十年の後、23歳になったパンケイエフ青年はフロイトのもとを訪れることになる。しかし「抑鬱で行き詰まり、1910年に藁にもすがる思いでフロイトの扉をたたいた人物は、数日後フロイトの寝椅子に横たわった人物とは同一の人格ではなかった」⁽⁴⁾。著者たちのこの表現は、今や的確に理解されよう。アーネスト・ジョーンズのフロイト伝の不正確な記述のせいで、著者たちは予備面接の際と勘違いしているが、実際には第一回のセッションで「ユダヤ人の詐欺師め、お前を後ろから犯し、頭の上に大便してやるぞ」⁽⁵⁾と暴言を吐いたのは、娘の死で途方に暮れていた、そして彼自らも現実には既に死者となっていた、パンケイエフの内なる〈父〉だった。フロイトが言う「喪の仕事」とは、近親者の死を受け止め、喪失体験を克服する作業のこと。現実世界では死んだ死者たちを、心の中でもう一度殺して忘れる仕事だと言ってもよい。しかし、彼の心の中では、現実には死んだはずの姉も父も死んでおらず、忘れられていない。したがって、自我と他者が一体になるという究極の性的な快楽は、彼には拒まれたままだ。これに対しその後、寝椅子に横たわったのは、おおむね〈姉〉であったろう。パンケイエフにとってフロイトはまぎれもなく父親であったから、それを補完する役割を引き受けたのだ。「姉が自らを父親に捧げたように、彼は自らをフロイトに捧げたのである」⁽⁶⁾。以後、最初の四年半、さらに中断をはさんで1919年から再開された面接治療の間、〈姉〉は父親との恋の戯れ、転移性恋愛を演じた。のらりくらりと弟の思い出や夢を語り続けたが、たとえフロイトが面接終了期限の設定という強硬手段に訴えようとも、肝心なことは何ひとつ漏らさなかった。同性愛者でマゾヒストの分析家は、患者と自分との間の、あまりにも多くの符合に魅せられ、勝手に彼の立場に立ったつもりになって、かつて母が父に愛されたように、女として父に後背位性交されたいという幻想の共有を要求した。〈姉〉にとっては迷惑な話だったが、まあそれでも構わなかった。〈姉〉と〈父〉の関係は暴かれず、「秘密」は保持されたからである。「かつて起こったことを無効にするために、諸々の破局的な語は、何としても封じ込められなければならない。締めよう、括約筋を締めよう！ 致命的な言葉を便秘させよう！」⁽⁷⁾ むろん狼は父なわけだし、通常、息子に去勢の威嚇をするのも父だから、パパが「お前を食べちゃうぞ」なんて言ったという話は、どんなにしても無害だ。でも、こんな無駄話の裏には、発話者の意図に反して謎語の形で真実を漏らそうとする言葉があった。というわけで二人のセッションは、そしてまたアブラハム/トロークの記述もまた、かの「狼の夢」にさしかかる。

まず著者たちは例の夢における狼が何匹だったかという点に着目する。フロイトが最終的な訂正後の数字「五匹」を重んじたのに対し、訂正は抑圧のしるしではないかと彼らは考える。だとすれば、一番最初に言った「六匹か七匹」、とりわけ最初の「六匹」が重要だ。夢はドイツ語で語られ、フロイトによってドイツ語で記述されたものだが、6はロシア語では Chiest という。

これは「竿」「マスト」をも意味し、象徴的には「ペニス」の意味でもあろう。するとロシア語辞書を引いていた著者たちは、その隣にある Chiestiero、Chiestierka という語に興味を惹かれる。これは「6人のまとまり」という意味だ。そう言えばドイツ語で「姉妹」は Schwester だったなと考えると、ロシア語辞書で「姉妹」を引いてみると、Siestra およびその縮小形 Siestierka が見つかる。狼はもとより父であるから、すると「六匹の狼」という言葉自体の背後にロシア語では Siestierka-Bouka 「姉-狼 (父)」の観念連合が隠れていることになる。著者たちは辞書に並んでいる似た響きの異義語をたどって連想を紡ぎだしてゆく。同義語の隣接物を探す観念のメトニミーではなく、いわば辞書中のメトニミーと言うべき独特な方法である。ただし、この方法の弱点は容易に指摘できる。著者たちはロシア語をちゃんと発音できなかったのだ。だからロシア語辞書という印刷された文字に頼るほかない。夢を見たのが4歳の子供だったことを想起するならば、言葉の響きこそ最重要であったはず。これに対し、著者たちはこう抗弁している。「われわれはロシア語を知らないし、辞書にある語を音節に分けて発音するところまでほとんど行かないのだが、それはわれわれの苦しみであるとともに、しかしたぶん、われわれのチャンスでもある。何にせよそれは、一言語の因習に左右されずに、われわれ自身の聴き取りをより良く追求することを可能にする」⁽⁸⁾。4歳の子がロシア語辞書を引くとは考えられないが、まあ、そんな弱点は承知の上で、さらに先に進むとしよう。確かに今これを語っているのは、23歳のロシア人なのだから。

1926年にブランズウィックに分析治療を受けるようになってから、狼男が語った幾つかの夢の中に「摩天楼の夢」がある。夢そのものの引用は省くが、アブラハム/トロークは「摩天楼 Wolkenkratzer」という言葉にひっかかる。ドイツ語では「雲 Wolke(n)」を「こするもの Kratzer」という合成語で、英語の skyscraper の直訳だが、著者たちはここに「狼」が隠れていると言う。ロシア語の「狼」は Bouka だが、Volk というもう一つの名詞もあるからだ。一方、動詞としては kratzen (こする) となる後半のドイツ語のロシア語での類義語を求めると、Skrebok (紙や羊皮紙の上の字を引っかいて消すナイフ)、Skroït (削る)、Skrip (軋む音) などがあり、これらの語根 Skreb はドイツ語の Krebs (癌、腫瘍) をほぼひっくり返したものだ。そう言えば、1926年に狼男がフロイトに不安を訴え、ブランズウィックを紹介されるに至る原因は、鼻にできた出来物だったではないか。一方、フロイトには、やがて彼の命を奪う顎の癌が1923年に発見されていた。「引っかき傷」「傷痕」「癌」などは鼻をめぐる心気症的恐怖、および自らの精神的支柱=父親たるフロイトの癌に関わる語彙と考えることができる。単語として浮上してはこないが、これらの背後に控えているのはフランス語 lupus séborrhéique (皮脂漏性狼瘡、にきび) であろう。lupus とはまさに「狼 loup」である。

「六匹の狼」「摩天楼」、狼男が喋った夢のテキストのなかに現われてくるこれらの語彙は、いったい何をしているのか。「これらの単語すべてはある違う語を、つまり性的快楽を記しており、

いわゆる『誘惑場面』を仄めかしている違う語を覆い隠しているにすぎないと認めてはならないのか?」⁽⁹⁾その「違う語」は「破局的な語」なので絶対に封じ込めなくてはならない。「たぶん何らかの理由で発音されないこの語は、差し当たり未知のこの語は、多義的性質をもち、一つの音声構造によって複数の意味を一度に表わしているはずであろう。それらの意味の一つは闇の中にとどまっているが、その一方では、それと等価になった他の意味、ないし他の複数の意味は、異なる音声構造によって、すなわち類義語によって言い表わされていることだろう」⁽¹⁰⁾。この類義語、「破局的な語」を仄めかしつつ覆い隠している語のことを、著者たちは単なるメトニミーと区別し、隠蔽の機能を強調するために埋葬語 (cryptonymes) と呼ぶ。クリプト (crypte) とは「地下墓室」「納骨堂」のこと。そして「破局的な語」を語らないために、ちょうど辞書で隣にあるような単語で言い換えつつ、覆い隠してゆく狼男の語法が、本全体の題名にもなっている埋葬語法 (cryptonymie) である。

ここで著者たちは、狼男の回想の中で特権的なリビドーが割り当てられていた女中グルーシャに思い至る。グルーシャは何をしていたか。床に膝をついてかがみ、尻を突き出した姿勢でふき掃除をしていたのだ。「床をふく」に当たる動詞を仏露辞典で捜し、さらに露仏辞典でそのニュアンスを探るという手続きの末に得られた答えは、ロシア語 tieret — 1) こする、2) 砕く、つぶす、3) 傷つける、4) 磨く。ロシア語 natieret — 1) 摩擦する、こする、2) ワックスで磨く、つや出しをする、3) 自らを傷つける、すりむく。かくして「摩天楼 Wolkenkratzer」は、夢の中で立派な尻尾を誇示している狼のペニスをこする者、と判明する。「お姉ちゃま、僕のペニスをこすって頂戴」。これこそが、絶対に口に出してはならない「破局的な語」であった。鼻にできた吹き出物に対する心気症的恐怖は、第一には lupus (狼 = 父 = フロイト) の出現/病気に対する危惧であり、第二には「引っかけ傷」の元になる行為 tieret (こする) が明るみに出ることに対する恐怖だったわけである。

『狼男自身による狼男』に収められたパンケイエフ本人の回想が、この解釈を強力にサポートする。1906年に姉が自殺した後、翌1907年の4月はじめ、彼は姉が死んだコーカサス地方を旅する。建て前としてはこの地で決闘により殺された詩人レールモントフの墓に詣でるためだったが、その後、彼がさらに向かったのは南カフカスのテレク川の源流であった。ドイツ語で Terek と書かれる川の名のロシア語表記は Tierék (ティエレク) である。夕食にはテレク川でとれたマスが供されたが、原文ではその前、「午後の時間をいわばつぶすために、私はかばんから油絵具のはいった小箱を取り出し、手近なテレク川の溪流の岸辺に向かった」⁽¹¹⁾とある。絵筆で絵を描くこともロシア語では tieret (こする) になるが、一方、ドイツ語の「小箱 Kästchen」はフロイト以来、典型的な女性性器の表象である。さらにまた翌年の1908年、彼はクレペリンに勧められた南ドイツのサナトリウムで会ったドイツ人看護婦に一目惚れして結婚に至るのだが、回想記にはオデッサ出身の老婦人が最初に彼女の名前を教えてくれたのだと書かれている。その名前は

もちろん「テレーゼ Therese」だが、アブラハム/トロークは老婦人がロシア語なまりで発音したに違いないと空想する。つまり「テレージア Tieretsia」、これは自分の身体をこすするという意味だ。愛称なら「テルカ Terka」だが、ロシア風に発音すると「ティエルカ Tierka」。「六匹」から導かれた「姉 Siestierka」に戻ってくる。驚くべきことに、著者たちは回想記のこの一節を知る前から、狼男の内なる〈姉〉をあらわすための仮名としてティエルカを使っていたのだった。

こんな独露ちゃんぽん読みが許されるのか、という疑念に対しては、ある手紙が見事に答えてくれよう。冒頭で触れた、ミュリエル・ガーディナーが著者たちに転送してくれた、1959年の彼女宛てのパンケイエフの手紙である。英独仏露語を使いこなした彼のような多言語使用者のメッセージは複数の言語を横断するような読み方で読んでも構わない、いやむしろ読まれるべきだということを、この手紙は示唆している。彼らの本に仏訳で引用されたものしか読めないが、原文はドイツ語だ。

これら不幸な出来事にもかかわらず、言うまでもないことですが……私は読書への関心ももち続けようと努めています。こうして私は、今日まで私がほとんど知らなかったテーマであるドイツの神々を論じたフェリックス・ダンの本を読んだばかりです。私はその本に……とくに一どう言えばいいでしょう？ —比較言語学の観点から関心があるのです。というのは、いくつかのロシアの言葉のゲルマン語根を納得することができたからです。例えば、Trude というファーストネームはドイツ語の Trud にその源があり、それは「力」を意味します。古ゲルマン語のこの単語は十中八九、ロシア語 Trud の語根です。というのは、ロシア語で trud は、仕事のために必要とされる「努力」を意味するからです。ドイツ語の Blitz を言い表やすためのロシア語の語 molnia「稲妻」は miólnir から派生しているに違いありません。実際この単語は、民間信仰によれば稲妻を生み出すゲルマンの神《Thor-Donnar》のハンマーを指すのでしょう。稲妻 (Blitz) は、雷がもっているハンマーの角の先端でしょう。それにロシア語の名詞「水」voda は、サンスクリット語で同様の概念をカバーする名詞と同一です。voda、veda = Wasser。⁽¹²⁾

こうして理論武装を整えた著者たちは、いよいよ本格的に「狼の夢」との対決に乗り出すのだが、その前に彼らの思い描く狼男氏の幼年期の物語をさらに進めて、最後まで語っておこう。「狼の夢」読解ではドイツ語、ロシア語に加えて英語が投入されるし、英語を母国語とする人物、つまり子供たちに英語を教えていた英国人家庭教師ミス・オーヴンが主要キャストに加わってくるからだ。3) 坊やは姉が言った、彼女と父親との関係を大人に確認せずにはいられない。最初に尋ねたのは、乳母ナーニヤか家庭教師のミス・オーヴンか？ とにかく結果的に、彼は誰にも言うべきでなかった姉と父との関係を不用意に漏らしてしまうことになる。4) スキャンダルの発

覚。もし家庭教師なら、まず直ちに母親にご注進に及んだらう。著者たちはオデッサへの移住（パンケイエフは5歳）前に家庭教師が解雇されたという事実から、彼女を怪しいとにらんでいる。不品行を糾弾された父親は象徴的な意味で去勢されてしまう。どちらが誘惑したのか定かではないが、ともかく父娘間の「誘惑」は取り返しのつかぬ結果を招いた。この家庭崩壊が後に起こる姉の自殺、父親の早すぎる死（パンケイエフは睡眠薬の過剰摂取と言っている）につながってゆく。英語を読解に投入することについては、今度はフロイト先生が支持してくれるだろう。個人情報隠すために患者の出自を一部偽っているが、1927年のエッセイ『フェティシズム』に明らかに狼男と思われる人物が登場しているからである。

最も奇妙に思われたのは、ある若い男性が「鼻の光沢」なるものをフェティシズムの条件に挙げていたケースである。この件のびっくりするような説明は、患者は子供の頃、英語で教育を受けたが、それからドイツへ来て母国語をほぼ完全に忘れてしまったという事実によってもたらされた。幼少期初期に由来するフェティッシュ（呪物）はドイツ語ではなく英語で読まれる必要があった。「鼻の光沢 Glanz」とは本来、英語の glance（一瞥）であり、「鼻への視線」であった。つまり鼻がフェティッシュだったのであり、なお言い添えるなら、そのフェティッシュに彼は自分の好みにより、他人には分からぬ特別な光彩（Glanzlicht）を与えたというわけなのだ。⁽¹³⁾

アブラハム/トロークは、フロイトは英語読みをもう一歩進めて、「鼻 nose」= (he) knows と読むべきだったのに、と付け加えている。鼻の出来物こそは、彼が一部始終を「知っている」ことを示す証拠なのだから。またフロイト本人にとっても、かつて鼻はまぎれもないフェティッシュだった。鼻と生殖器の直接対応を唱える耳鼻科医ヴィルヘルム・フリースとの交際時代、フロイトはたえず鼻粘膜の腫れに悩まされ、フリースに電気ゴテで粘膜を焼いてもらっていた。その原因は、持病の偏頭痛への鎮痛剤として鼻の内側にコカインの水溶液を塗ったせいなのだが。

さて、回り道の果てに再び「狼の夢」に戻ってきた著者たちは、今度は「窓」という言葉に注目する。患者はフロイトに「窓」は「眼」の意味だと進んで自由連想しているが、「窓」が「眼」と分かっているのなら、なぜ「窓 window」が夢に出てくるのか？ 鼻に出来物ができたのは、1925年の聖霊降臨祭の日曜日（Whit-Sunday）であり、その日に The White Sister という題名の映画を見たことと関わりがありそうだ。翌1926年の Whit-Sunday には狼男はフロイトに宛てて「狼の夢」は実際に子供の頃に見た夢だと証言する手紙を書いている。例のオットー・ランクの解釈に反論するためである⁽¹⁴⁾。ロシア語では「窓」は okno、「眼」は変化形の語幹では oko ないし otch。ロシア語辞書で「眼」の周囲をあさっていると、otche-vidietz（目撃者）と otchevidno（明らかに）を見つける。後者は夢の中にも出てくる語だ。「明らかに」 otche（眼）と

window (窓) の間につながりがあり、それは son (息子) の witness (証言) の日である Whit-Sunday とも関連してくるのではないか? それは otche-vidiet of the son (息子の実見証言) ……と、ここまで言いかけたところで著者たちは「狼の夢」一字一句の逐語的解釈、いや実際には「超訳」に移ってゆく。いよいよ本書のクライマックス、その最もめざましい、裏を返せば最もトンデモな一節であり、長大なので少々はしょうらざるを得ないとしても、彼らの「超訳」の凄まじさをできるだけそのまま味わっていただくために、可能な限りコメントをはさまない直接引用でご紹介したい部分である。まず最初の夢テキスト、ドイツ語原文は「私が見たのは、こんな夢です。あたりは夜で Ich habe geträumt, dass es Nacht ist,」

「夢見る」は、ロシア語では vidiet son と言われる。vidiet には whit、さらには witness [目撃者・証人] が、son には Whit-Sunday の sun が響いている。しかも vidietz はロシア語では「証人」を son は「息子」を意味する。従って、一方では、vidiet son 「夢見る」、「夢を見る」と vidietz 「証人」、son 「息子」と、他方では witness 「証人」と son 「息子」の間に同音異義関係が、あるいはそれに近いものがある。[中略]「夜に」、副詞、ロシア語では notchiou。われわれはそれも英語で、not you 「あなたではない」と聴き理解せずにはいられない。あえてわれわれは仮説を試みる。The witness is the son, not you. すなわち、証人は息子で、あなたではない。⁽¹⁵⁾

「ばかげている！」と著者たちは早くもここで自ら茶々を入れてしまっているが、こんなのはまだほんの序の口である。先へ進もう。次のドイツ語原文は「私は自分のベッドに横になりました und ich in meinem Bett liege,」

英語では、「ベッド」は bed、「寝ている」は lying と言われる。これがおそらく、事柄をより良く照らしうるであろう。夢を見る者の耳には、bed (「ベッド」と but (英語で「しかし」) は同じ音として響きうるし、lying 「寝ている」に関しては、ロシア語話者の子どもにとっては、「彼は嘘をついている」 he is lying (「あなたではない、彼が嘘をついている」) と奇妙な同音異義関係を構成するはずだ。それゆえ、全体を取り上げ直そう。The witness is the son, not you, but he is lying. 証人は息子だ、あなたではない。彼は嘘をついているのだ。⁽¹⁶⁾

「証人は息子」と彼のことが三人称で言及されていることから分かる通り、この夢を語っているのはセルゲイ坊やではない。彼の内に取り込まれた別の声が語っているのだ。加えて「あなたではない」という言い回しから分かるのは、この声には「あなた」と呼ばれるべき対話者がいること。しかも見ての通り、この対話は実は英語で行われている。となれば、話しているのは母親

と家庭教師ミス・オーヴンだろう。最初に話したのは、こんなことあってほしくない、嘘であればいいと思っている母親に違いない。次の、原文ではカッコに入れている部分では、対話者のミス・オーヴンが語ることになるのだが、その前に著者たちは「クルミの木」というクリプトニーム（埋葬語）について検討する。ロシア語では oriekh、これは「罪 khriekh」という言葉にきわめて近いし、両方とも語末の -ekh にアクセントがあるので、いわば韻を踏むことになる。ミス・オーヴンの言葉である夢の続きは「私のベッドは足の方が窓に向いており、mein Bett stand mit dem Fußende gegen das Fenster.」

「そうです、彼のベッドは足の方が窓に向かっておかれていたんです！」（含意— [だから] 物理的に、子どもは後ろで起こったであろうことを見ることはできなかった）。英語では、his bed was placed footside before the window — たまたま bed と window が本来の意味で使われており、彼のベッドは足の方が窓に向かっておかれていたのだとしても、しかし、この変異形は満足をもたらすことはありえまい。foot = 「足」は truth = 「真実」を喚起し、もっと先でわれわれは、この仮説の妥当性を検討する機会をもつことにする。そこでわれわれは、この一節をどちらかといえば次のように読む。「私のベッドは」、bed = but = しかし、「立っていた」(stand、文字通りには「立っている」)。Seruguei にとっては、それは「横になっていない」、not lying、普通の言い方では彼は嘘をついていないを意味する。「足の方」、「窓に向かって」は the truth と witness である。こう言おう、それは真の証人だ、より良くは、彼は真実を言う証人であると。⁽¹⁷⁾

セルゲイの内なる家庭教師は彼がその場面を実際に見たわけではないと語っている。でも彼が真実を語っていることは間違いない。姉から聞いたからである。そこで夢はかの「クルミの木」にさしかかる。「窓の向こうには古いクルミの木が並んでいました。vor dem Fenster befand sich eine Reihe alter Nussbäume.」

英語で「テキスト通りに」いえば、Before the witness there was a series of the old's 《khriekh》(old = 「年をとった」、khriekh = 「罪」(oriekh = 「くるみ」の類音語))。すなわち、証人の前には一連の「年寄り」の大罪があった。⁽¹⁸⁾

ドイツ語では eine Reihe、英語では a series of なので、証言者は「罪」は一回限りではなく、繰り返し犯されたと考えていることになる。ほんの少し飛ばして、さらに重要な証言へ進もう。「突然、窓がひとりでに開きます。Plötzlich geht das Fenster von selbst auf.」

「突然」、ロシア語で v'droug、それは英語の th'truth 「真実」を偽造している。こう理解しよう。「真実は、証人が私に [心を] 開いた (私に打ち明け話をした) ことだ。」「ひとりでに」、ロシア語で samo saboi は、英語 somewhat as a boy 「多少子どもがそうするように」を偽造している。すなわち The truth: the witness opened himself to me somewhat as a boy. それゆえ女家庭教師は断言する。真実は、子どもが多少ともそうするように、証人が私に打ち明け話をしたということだ。⁽¹⁹⁾

「そして私が見て、ひどくぞっとしたのは、窓の前の大きなクルミの木に幾匹かの白い狼がすわっている様でした。und ich sehe mit großem Schrecken, dass auf dem großen Nussbaum vor dem Fenster ein paar weiße Wölfe sitzen.」

英語－ロシア語では、I see the great khriekh. I see = 「私は理解している」、Schreck = khriekh = 「罪」である。すなわち、それで私は大罪を理解している。⁽²⁰⁾

「数匹」、ロシア語では para、一対、一組……一つがい。[中略]
「白い狼が座っている」、《white wolves (l を口蓋喉音で woulfz と発音する) setting》。われわれは適切な手がかりを掴んでいるのか？ 後のいくつかの夢とつき合わせると、そこで問題になっているのは、英語－ロシア語の類音語である可能性が大きい。wide goulfik だ！ (l の発音は上に同じ)。幅広いズボンの前開き、すなわち広く開いた前開き。⁽²¹⁾

ドイツ語の ein paar は、名詞で ein Paar と言われた場合と違って、決してカップル (父と姉) ではないのだが、著者たちは公然とドイツ語を無視する。「狼」はなんと「前開き」になってしまふ。そして問題の「六匹」。「六匹か七匹いました。Es waren sechs oder sieben Stück.」

前に示したように、「6匹の群れ」、《sisteron》、siestorka は数字ではなく、間違いなく「姉」を意味する。要するに There was the sister、それは姉だった。⁽²²⁾

「狼たちは真っ白で、Die Wölfe waren ganz weiß.」

ロシア語－英語に翻訳されると、それは以下を意味する。The 《goulfik》(was opened) quite wide. ズボンの前開きが広く開いていた。⁽²³⁾

もう少し省略し、夢の終わりに急ごう。著者たちは、夢の最後の部分の語り手をセルゲイ自身、もしくは彼の内に取り込まれた母親と考えている。解雇された女家庭教師のスキャンダルを暴露する (叫び声をあげる) ぞという脅しに対して、セルゲイは言ってしまったことを後悔し、この

記憶を永久に封印しようとする。しかし、それは姉に成り代わって父との間で味わった性的快楽を断念することをも意味する。二つの苦しい選択の板ばさみになって、彼は目を覚ますというのだ。「大きな不安、明らかに狼に食われるという不安に圧迫されて、私は叫び声をあげ、Unter großer Angst, offenbar, von den Wölfen aufgefressen zu werden, schrie ich auf」目を覚ましました。

ここでは、英語を援用することはもはや、ほとんど役に立たないだろう。[中略] 従って、ロシア語による解釈で満足することにする。実見証人 (otchevidietz) によって掻き立てられた不安に、「ズボンの前開き」が投獄されるのではないか (ロシア語の *sidiat* = 彼らは食べるだろう、かつ *siedat* = 彼らは監獄で座っている)、そして侮辱 (*cried out*) されるのではないかという不安に圧迫されて……目覚めが不意に到来する。⁽²⁴⁾

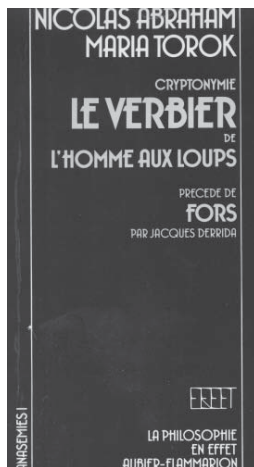


図1. 『狼男の言語標本』
仏語初版の表紙



図2. 姉アンナとセルゲイ
(セルゲイ5~7歳頃の写真)

Whitney Davis: *Drawing the Dreams of the Wolves*. (Indiana UP.) 1995, p.36.

こんなもの言語学でも心理学でもあるものか、ただのオカルトに過ぎないという批判に対しては、確かにその通りとお答えするしかない。精神分析に常につきまとう問題だが、結論先にありきで肝心の言語テキストをちゃんと読んでいないではないかという批判もまた、仰せの通り。けれども、精神分析はそもそも初めから少なからずオカルトであったのであり、そのオカルティックな、秘教主義的な部分の極みが本書と言ってもよい。精神分析はその成立以来、言葉が発言者の意図を裏切って、抑圧された秘密を語ってしまう、つまり人間が道具であるはずの言葉を支配

できないという不思議に魅せられてきた。人間は言語（ロゴス）の主人であるはずなのに、実は奴隷なのである。著者たちは理論的総括部となる最終章を次のように書き出している。「精神分析的な聴き取りは言語に対する特殊な扱いからなる。ふつう人が意味作用を受け取るところで、分析家は象徴を受け取る。象徴 [= 割り符]、すなわち一部分がそこに欠けている所与、しかも、いまだ未決定であるのと同時に、原理的には決定される仕方である所与のことだ。象徴の補完物を見出し、それを不確定性から引き出すこと、そこにこそこの聴き取りの特異な狙いがある」⁽²⁵⁾。しかし、狼男にとって「埋葬語」の隠された意味を口にすることは抑圧されたものの回復どころか、直ちに身の破滅を招くのであり、もとよりインタヴューアのオブホルツァーが『狼男の言語標本』を知るはずもないが、たとえ問われたとしても絶対に肯定できるものではない。この状況はフロイト精神分析における通常の「抑圧 Verdrängung」とは大きく異なり、ラカンがフロイトの狼男論文から取り出して独自に練り上げ、精神病に適用した「排除 Verwerfung」にむしろ近いが、「秘密」を語るためのシニフィアンがちゃんと残っているという点では、ラカン理論でも説明できない。しかもアブラハム/トロークの見立てによれば、セルゲイは姉と父との現場を見てはいないのであり、この「一度も現前したことのないもの」、姉の言葉が「物」のように（著者たちもこの言葉を使う）生命あるものとなって、彼につきまとい、彼の一生を支配しているのだ。ジャック・デリダがこの本に特別な関心を寄せた理由も分かろうというものである。患者本人の協力が絶対に得られない「埋葬語」を暴きたてるために、彼ら以外のどんな方法があるだろうか。

実は著者たちは、彼らの作り上げた物語が「完全に虚構的性質 *caractère entièrement fictif*」⁽²⁶⁾を有するものであることを認めてもいる。フィクションとしては、この物語は無類の面白さを誇る。こんなに各部が精妙に照応しあい、張られた伏線がもれなく生かされるような推理小説など、めったに読めるものではない。最後にもう一つ、その照応の徹底ぶりを印象づけるエピソードを紹介して、この章を閉じようと思う。高校生時代のセルゲイはヴォルフ（狼）という名の先生にラテン語を習っていたのだが、ラテン語作文で *filivs*（息子、フィリウス）と書くべき箇所にフランス語の *filis*（息子、フィス）を入れてしまった。フロイトの論文が伝えている逸話だが、著者たちは抑圧された *iv* の意味をまずこう解釈する。脱落した *iv* の発音はイウ＝ユーだから、*The witness is the son(filis), not you!* 「目撃者は息子で、あなたではない」。だが、*iv* の視覚的形もまた原因だという。フロイトによるセッションの間、患者は5時になると部屋にある柱時計をしきりに見て、不安な表情になった。5時は例の性交の目撃時間であり、童話『狼と七匹の子やぎ』では柱時計の中に逃げ込んだ一匹だけが助かるので、どうか僕を食べないでくださいと狼＝父親＝フロイトに哀願しているのだとフロイトは解釈した。アブラハム/トロークはこれに対し、*v* は時計の文字盤の5時の形であり、*i*（時計の短針）が5時を指し、*i* が *v* の真ん中に来る様は、「ズボンの前開き」から勃起したペニスが現われる姿そのものだと考えた。彼がV字型に羽根を

開いたキアゲハを見て恐怖を感じたのも、羽根のvと胴体のiが同じ形を表現していたからだ。その形は彼にとって、まさに言うてはならぬ「秘密」に触れるものだった。

5. 狼男とは誰だったのか？



図3. 「狼の夢」(1950年代に描かれた油絵 *Drawing the Dream of the Wolves*. p.52.)

再度、「狼の夢」の図を掲げたのは、あまりに強烈なアブラハム/トロークの「超訳」の印象をいったん振り払うためである。夢は言語以前に何よりも視覚印象であるし、フロイトの患者「狼男」であることが彼のアイデンティティの支えになってしまったせいでもあるが、後年もしばしば「狼の夢」の絵を描いている素人画家パンケイエフにとって、絵はやはり重要だと考えたからでもある。今回、掲げたのは1950年代に書かれた油彩画だが、基本的にはフロイトの論文に載ったスケッチと同じ。狼は相変わらず五匹(尻尾の向きも完全に同じ)、クルミの木は言語では「古いクルミの木が並んでいました」と複数あったように語られているが、絵では一本だけである。こういう枯れ木の描き方はカスパール・ダヴィッド・フリードリヒなど19世紀風景画のクリシェにのっとったものだ、とホイットニー・デイヴィスは論じている⁽²⁷⁾。スケッチと違うのは、雪の積もった地面が描かれていること。こちらの狼たちはぬいぐるみ風でさえあり、すぐに飛びかかってきそうな怖さは感じない。実際には性交の激しい運動の表現というフロイトの解釈は、や

はり無理がある。両親の性交場面というのは、患者に逆転移したフロイトが勝手に見た幻想であることは、もはや否定しようがない。それが後背位性交であるのは、母親にペニスがないのが見えるためではなく、母親に成り代わったフロイトにとって同性愛の肛門性交が欲望されたからである。とはいえ、「狼の夢」の絵に性的な含意がないわけではない。子供がいるのはベッドの上、性的な行為が行われる場所であるし、狼たちは動かないが、じっと見つめられ、いわば視線によって犯されるような威圧感はある。

パンケイエフは自分の自我がない代わりに、会う人ごとに各人が望む幻想を投影するためのスクリーンになってくれるような人物だったのだろう。フロイトにとっても、ガーディナー、オブホルツァーにとっても、そして実際には彼に会っていないアブラハム/トロークにとっても。「彼の埋葬語が秘密のままに保ったのは、彼の何か固有名詞のようなものである。埋葬語は、まずは彼の固有名詞について言われる」^{クリプトノム}(28)とデリダは述べている。セルゲイ・パンケイエフという戸籍上の名前も、精神分析によって与えられた狼男という名前（彼はしばしば、自らそう名乗った）も、彼の本名ではなかった。なぜなら彼を構成していたのは、体内化された無数の他者たちだったから。だとすれば、彼がどうか僕を食べないでくださいとフロイトに表情で哀願した時、また夢の中の狼たちが視線によって彼を犯そうとする時、彼が感じていたのは、何よりもまず他者によって自我が浸食される恐怖だったに違いない。以後の「狼男」文献、特にアメリカで書かれたものにおいては、『狼男の言語標本』はほぼ全く言及されない。彼らほど「腑に落ちる」、少なくとも面白い「狼男」論がまだ書かれていない現状では、これほどのトンデモ本扱いは、いささか不当ではないか。パンケイエフに接した人々は異口同音に「自我が脆弱で、簡単に他人に同調してしまう」という印象を口にした。個々のテキストの読みに関しては少なからぬ「行き過ぎ」があったとしても、アブラハム/トロークが彼の心の状態、すなわち後の精神科医たちが精神病寄りの境界例、あるいは自己愛性人格障害といった語彙で論ずることになる状態を、彼らなりの言い方ですこぶる正確に捉えていたことには、改めて感嘆せざるをえない。

他者たちから遮断されて一他者を同化する力を欠いていて一彼にできることといえば、姉にしたように、他者たちを彼自身の内部に居座らせることだけである。彼は、良い人物であれ悪い人物であれ、彼らを自らの内的世界に住まわせる。〈父親〉、〈母親〉、ナーニャ、ドイツ語の〈教師〉、〈医師〉、そして最後に治療者の働きをする〈精神分析家〉である。最初の体内化が、磁石が鉄屑を引き付けるように他の体内化を誘うのだ。狼男はそれぞれの人物へと代わる代わる同一化し、対話し、共謀する。彼の人生は、それらの人物の間にあってはならない出会いと秘密の漏洩を避けるために彼らを操るところにある。人物たちは皆、根本的抑圧を、欲望自体に内在する矛盾の抑圧を、死をもたらす快樂の抑圧を維持するために狼男の中にいる。[中略] 今からわれわれが理解するのは、狼男が彼自身ではないための様々なあり方しか分析に晒すこ

とができなかったということだ。それだけが、自分自身の名前で一度もそう言うことができな
いままに、彼が真に誰なのかが把握されうるための唯一の方策だったのである。⁽²⁹⁾

注

- (1) Freud VIII, S.140. 全集第14巻、15頁。

フロイトのテキスト引用は Studienausgabe (Fischer Taschenbuch) 1982により、以下の注では巻数のみを示す。訳はすべて私自身によるものだが、読者の便宜を考え、邦訳(岩波書店『フロイト全集』)の巻数、頁数を併記する。

- (2) Nicolas Abraham & Maria Torok: *Cryptonymie. Le verbier de l'Homme aux loups*. (Flammarion) 1976, pp.89-90.

(港道 隆/森 茂起/前田悠希/宮川貴美子訳)『狼男の言語標本』(法政大学出版局)2006、17頁。

まさか、この本が邦訳されるとは思わなかったが、訳文は原文のやや読みづらい感触まで見事に再現しており、文句のつけようがない。よって、原書のページ数は常に併記するが、本書からの引用はすべてこの邦訳をお借りすることにする。なお、筆者の手許には以下の英訳、独訳もある。

(Translation by Nicholas Rand) *The Wolf Man's Magic Word: A Cryptonymy*. (University of Minnesota Press) 1986.

(Übersetzt von Werner Hamacher) *Kryptonymie. Das Verbarium des Wolfsmanns*. (Ullstein) 1979.

また、日本語によるきわめて優れた紹介、要約としては豊崎光一「Prétextes フィクションと/としての精神分析」(『エピステーメー』終刊号 1979年7月、後に『ファミリー・ロマンス』小沢書店 1988 所収)がある。

- (3) *ibid.* p.90. 邦訳 17-18頁。

ちなみに、著者たちは後に述べる場面4)での父親の象徴的去勢を重く見る立場から後に、すなわち1973年以降に書かれた部分では、姉による最初の去勢威嚇という物語を取り下げ、二人の「秘密」を性的快感に関わる事柄だけに限定してしまうのだが、私の考えでは、既にマゾヒストにされてしまっている坊やにとって去勢威嚇という苦痛=快感であるから、取り下げる必要はないし、そもそもこのファクターがないと、最初の「体内化」の説明が不首尾に終わってしまうと思う。

- (4) *ibid.* p.88. 邦訳 15頁。

- (5) Sigmund Freud/ Sándor Ferenczi: *Briefwechsel Band I/1* (Böhlau) 1993, S.214.

前述の通り(「フロイトと狼男(1)」文学研究科紀要第56輯、156頁参照)、フロイト/フェレンツイ往復書簡集の刊行によって、この発言はコンテキスト込みで正確に復元できるようになった。

- (6) *Cryptonymie. Le verbier de l'Homme aux loups*. p.92. 邦訳 20頁。

- (7) *ibid.* p.126. 邦訳 53頁。

- (8) *ibid.* pp.143-144. 邦訳 71-72頁。

豊崎光一によれば、早くも1976年当時、ロシア出身のラカン派分析家、ウラディーミル・グラノフがこの弱点を指摘したという。『ファミリー・ロマンス』267頁参照。

- (9) *Cryptonymie. Le verbier de l'Homme aux loups*. p.114. 邦訳 42頁。

- (10) *ibid.* pp.114-115. 邦訳 42頁。

- (11) Muriel Gardiner (Hrsg.): *Der Wolfsmann vom Wolfsmann*. (Fischer Taschenbuch) 1982, S.54.

- (12) *Cryptonymie. Le verbier de l'Homme aux loups*. pp.138-139. 邦訳 66-67頁。

miölnir (ミヨルニール)とは北欧神話の雷神トール(ドイツ語でのドナル)が携える大槌、いわゆるトール・ハンマーの名である。最後の部分の voda はロシア語、veda はサンスクリット語、Wasser はドイツ語、いずれも「水」である。なお、邦訳はロシア語の単語に対してロシア文字表記を添えているが、原文にはないので、これのみ引用に際して省いた。

- (13) Freud III, S.383. 全集第19巻、275-276頁。
- (14) オットー・ランクの解釈については「フロイトと狼男 (1)」文学研究科紀要第56輯、161頁参照。
- (15) *Cryptonymie. Le verbier de l'Homme aux loups*. p.145. 邦訳 73頁。
注(12)の箇所と同じく、ロシア文字表記は省いて引用している。以下すべて同じ。
なお、フロイトのドイツ語テキストは拙訳、「フロイトと狼男 (1)」のものと同じ。
- (16) *ibid.* 邦訳 73頁。
- (17) *ibid.* pp.147-148. 邦訳 75-76頁。
- (18) *ibid.* p.148. 邦訳 76頁。
- (19) *ibid.* p.149. 邦訳 78頁。
- (20) *ibid.* p.150. 邦訳 78頁。
- (21) *ibid.* 邦訳 78-79頁。
- (22) *ibid.* p.151. 邦訳 79頁。
- (23) *ibid.* 邦訳 79頁。
- (24) *ibid.* pp.152-153. 邦訳 81-82頁。
- (25) *ibid.* p.229. 邦訳 157頁。
- (26) *ibid.* p.129. 邦訳 57頁。
- (27) Whitney Davis: *Drawing the Dream of the Wolves*. (Indiana University Press) 1995, pp.52-59. 参照
- (28) *Cryptonymie. Le verbier de l'Homme aux loups*. p.68. 邦訳 236頁。

結局、デリダの序文（実はどこにも「序文」とは書かれていない）については全く触れることができなかった。何といっても70年代デリダのテキストだし、本格的に論ずるには、それ自体、優に数万字を要するに違いない。けれども、実際にはデリダはかなりの頁数を費やして、（一部留保は含みつつも）本文の内容を要約、説明しようとすらしている。続く文章が自分のフランス語に劣らず難しく、一般読者にとって簡単に理解できるようなものではない、と考えたせいだろう。

- (29) *ibid.* p.91. 邦訳 18-19頁。